

れて、人に強く意識される。日本の子どもにとって、靴は、しばしば、その面での社会を代表するものとなる。ゆえに、靴という和生活習慣のことしか思い浮かべない考え方が出てくるのである。

たまたま靴の観察から始めたのであるが、そこから始めばならぬ理由があつてそうしたのではない。保育者として、また、第三者として子どもにふれるところには、どこにでも、子どもの世界が開かれている。その直接の経験を手がかりにして、それは何であるかと探っていくところに、子どもの世界の理解ができていく、素材は無限に近く、われわれの理解はまだ表層にとどまっている。

子どもと靴という小さな一つの場面をとり上げてみても、子どもにとり、靴はさまざまな感じ方をもって体験されていることを述べようとした。私はこのことを保育研究会で話したところ、そこにいる人々の靴の体験の中の光景がいくつもたちまち提出された。そして、幼稚園で生活習慣の問題というかならず靴のことが出てくることが何人もの人から語られた。靴をひとつとってもなお多くの課題が残されている。私共はその門口に立っただけである。

(つづく)

幼児の教育 第七十二巻 第三号

三月号 定価一〇〇円

昭和四十八年二月二十五日印刷
昭和四十八年三月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
発行者 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします